

聖書 使徒言行録2章14節～21節

02:14 するとペトロは十一人と共に立って、声を張り上げ、話し始めた。「ユダヤの方々、またエルサレムに住むすべての人たち、知っていただきたいことがあります。わたしの言葉に耳を傾けてください。02:15 今は朝の九時ですから、この人たちは、あなたがたが考えているように、酒に酔っているではありません。02:16 そうではなく、これこそ預言者ヨエルを通して言われていたことなのです。02:17 『神は言われる。終わりの時に、わたしの霊をすべての人に注ぐ。すると、あなたたちの息子と娘は預言し、若者は幻を見、老人は夢を見る。02:18 私の僕やはしためにも、その時には、わたしの霊を注ぐ。すると彼らは預言する。02:19 上では、天に不思議な業を、下では、地に徴を示そう。血と火と立ちこめる煙が、それだ。02:20 主の偉大な輝かしい日が来る前に、太陽は暗くなり、月は血のように赤くなる。02:21 主の名を呼び求める者は皆、救われる。』

説教 『終わりの日、若者は幻を見、老人は夢を見る』

- ◆キリスト教の三大祝祭は、降誕節(クリスマス)と復活節(イースター)と聖霊降臨節(ペンテコステ=五旬節)の三つであります。この三つの中で一番影が薄いのは、先週守りました聖霊降臨節・ペンテコステではないでしょうか。何かついでのようにその聖日が通り過ぎてしまう感じであります。しかし、主イエス・キリストの十字架の死と、それから3日後の主イエス・キリストの復活と弟子達への顕現、それから約50日後の五旬節・聖霊降臨節の日に、正に「キリスト教」が誕生したわけであります。そのキリスト教会誕生祭とも言うべき聖霊降臨節が、私たちにとって何故影が薄いのでしょうか。一つには、クリスマスは12月25日で固定祝日であるのに対して、復活節と聖霊降臨節は、毎年移動祝日であるということにもよるかと思えます。そして世間でもクリスマスは年末商戦と合わさってクリスマス・セールが賑やかに行われますが、イースターセール、ペンテコステセールというのは聞いたことがありません。それに復活節、聖霊降臨節はその内容からして現実感が乏しいということもあるのではないのでしょうか。
- ◆私たちは、今年の聖霊降臨節礼拝を伝道礼拝として守りましたが、結果的には求道者はただ一人で、全体の出席者も39人でした。恐らく私が北教会に赴任してからの24年間で一番人数の少ないペンテコステだったと思えます。しかし私にとって今年のペンテコステは面白かったし、楽しかった。なぜかと云えば、色々な予想外の事が次々に起きて、準備したようにはプログラムを進める事ができませんでした。しかし、色々なことが相まって、互いによくハーモニーして、私には楽しい、満ち足りたペンテコステになりました。ペン

テコステに相応しいものを感じました。人数の少なさがほとんど気にならなかったのです。ペンテコステに相応しいものを感じました。なぜなら最初の聖霊降臨節、キリスト教会の誕生の時も、聖書に書いてあるように、誰一人予想さえしなかったことが起きたのでした。ガリラヤ出身の弟子達が、五旬節の祭りを守る為にエルサレムに上って来た世界中の人々の言語・言葉で、神様の偉大な業を証ししたからです。聞いた人々は皆驚き、とまどったと書かれています。教会は人間の計算づくめで成り立っている存在では決してないのですね。

- ◆そこでペトロは言います。「これは、預言されていたことなのです。預言されていたことがこのように実現したのです。事実になったのです」と。「よげん」という時、昔は「予言」という字を当てました。それは、「将来起こることを、予め告げる」という意味で「予言」としたのですが、最近ではこの「予言」の意味も含めて、「預言」と言います。つまり「預言者」というのは神様の御言葉を預かった人間の事です。そしてその預言には「予言」もあれば、今・此処に生きている人々への神様の御言葉を告げるということも含まれるのです。
- ◆ペテロは言います。「これこそ預言者ヨエルを通して言われていたことなのです。17『神は言われる。終わりの時に、わたしの霊をすべての人に注ぐ。すると、あなたたちの息子と娘は預言し、若者は幻を見、老人は夢を見る。18 私の僕やはしたためにも、その時には、わたしの霊を注ぐ。すると彼らは預言する。19 上では、天に不思議な業を、下では、地に徴を示そう。血と火と立ちこめる煙が、それだ。20 主の偉大な輝かしい日が来る前に、太陽は暗くなり、月は血のように赤くなる。21 主の名を呼び求める者は皆、救われる』」と。預言者ヨエルという人は、紀元前400年頃の人です。そのヨエルに与えられた予言が今このように成就したのだということです。人間が「夢」「幻」と思うような超越的な事が、現実に入ったということですね。正に、神様の御心が実際に啓示されたのです。奇跡です。
- ◆一般に「歴史は繰り返さない」と言いますが、それは本当です。似たような人はいくらも居りますが、同一人物は二人といたないので、同じ出来事はありません。しかし歴史において、同質のことは繰り返されます。ですから、わたしたちは他人の経験に共感するわけです。「預言は成就する」とは、そういう意味です。そして、神様が語られた事、即ち、預言は必ず成就するのです。そして、預言を信じるという事は、神様が歴史を支配し、御自身の善き御心を遂行されているということを知る事です。ですから、今、私達が、この聖書を、そしてここにペトロを通して語られていることを預言として受け止めるならば、今日の箇所の最後の言葉、「主の名を呼び求める者は皆、救われる」という言葉は、必ず成就するということでもあります。神の名を呼び求める者は皆、本当に救われるのです。
- ◆この関連で、以前にもお話ししたことがあるのですが、もう一度話させていただきます。私はこの北教会に赴任して今春で丸24年になります。その前は北海道の苫小牧教会で働いておりました。私は5人姉弟で、年子の姉がいて私は長男です。私以外の姉・弟・妹は皆

大阪に住んでおりましたが、大阪を離れておりましたも、長男としての責任感でしょうか、年と共に、もし母に万一の事があったどうしようかと思案する事が段々と多くなりました。そして、思い巡らして、今度、大阪に帰る機会があれば、母にこう言おう、これだけは言っておこうと思い決めました。その当時、母はまだノンクリスチャンでした。「お母ちゃん。万一の事があって、天国に行くことになっても、初体験やから、右も左も分からへんやろから、その時は、『イエスさまー、イエス様ー』と、大声で呼びや。そうしたら必ずイエス様は助けに来てくれはるからな！」これだけは母に言っておこうと思っていました。そんな矢先、24年前に北教会に赴任することになりました。そして赴任した7月に母は大腸がんになりました。そして、その年のクリスマスにこの教会で息子の牧師から洗礼を受け、その翌年の8月8日にイエス様に伴われて天に召されました。私はこのような事になるとは夢にも思っていませんでした。しかし、神様の御心は、私たち人間の思いを遥かに越えて恵み深い事を、このことを通して、本当に思い知らされました。「主の名を呼び求める者は皆、救われる」というヨエルの預言は、紀元後30年代において本当なら、この21世紀においても本当です。神様の御名をほめ讃えないではおられません。

- ◆ここでは、ペテロが預言者、神の言葉を語る人とされています。そして、彼は言います。「主の名を呼び求める者は皆、救われる」と。これは、ペテロ自身の実体験に基づく「証言」なのです。彼は、「主イエスを信じる者は救われる」という、喜ばしい証言をしないではおれないのです。敬愛するイエス様が十字架に架けられて処刑されることになった時、彼は怖気づいて、イエス様のことを「あんな人は知らない。あんな人と自分は何の関係もない」と言ってイエス様を裏切りました。イエス様が十字架で息を引き取られた時、ペテロは本当に地獄に落ちました。しかし、そのペテロが復活されたイエス様によって、地獄から天国へと引き上げていただいたのです。実に「主の名を呼び求める者は皆、救われる」ということは本当ですが、それ以上に、イエス様という御方は、私が何者であっても、如何に卑怯者、極悪人、破廉恥漢であっても、そのような者をも見捨て給わず、その名を呼んで、救いの手を差し伸べてくださるのです。
- ◆ところで、「祭りを守る」という事は、日常化した生活、習慣化した日常を非日常化し、生の根源に思いをいたすことであります。更に、ペンテコステ・聖霊降臨節を祝うということは、非日常化の日常化なのです。つまり、恵み深い神様の霊、愛に満ちておられるイエス様の命に、この自分が常に、永遠に満たされているという非日常的奇跡を、日常的に生きるという幸いに与かっているということの自覚なのです。ペテロたちは、ガリラヤの一介の漁師でした。その彼らが、この聖霊降臨節を境に、故郷を捨て、自らの命をも顧みず、一切を神様の御手にお委ねして、神様の恵み、イエス様の御愛の伝道者とされたのです。それが、「若者が幻を見、老人が夢を見る」ということであります。

◆先ほど、私たちの先週の聖霊降臨節の礼拝が少数であったということをお話ししました。しかし、私は、何か清々しいものを本当に感じました。私たちは常日頃、人数の多いこと、財政が豊かである事を意識しつつ、また無意識のうちにもそれらを求めて、人間的にも卑しく成り下がっているのかもしれませんが。何があっても、人間的に如何に豊かであっても、そこに神様が居られず、イエス様が居られず、御霊なる神様が、私達と共に居られなければ、私たちの人間だけの力で、しかも功利的な意識で何ができるというのでしょうか。

◆使徒パウロは、コリント前書13章1節以下でこうっております。「たとえ、人々の異言、天使たちの異言を語ろうとも、愛がなければ、わたしは騒がしいどら、やかましいシンバル。たとえ、預言する賜物を持ち、あらゆる神秘とあらゆる知識に通じていようとも、たとえ、山を動かすほどの完全な信仰を持っていようとも、愛がなければ、無に等しい。全財産を貧しい人々のために使い尽くそうとも、誇ろうとしてわが身を死に引き渡そうとも、愛がなければ、わたしに何の益もない。愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。不義を喜ばず、真実を喜ぶ」と。またガラテヤ書5章22節以下でこうっております。「霊の結ぶ実は愛であり、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、柔和、節制です。これらを禁じる掟はありません。キリスト・イエスのものとなった人たちは、肉を欲情や欲望もろとも十字架につけてしまったのです。わたしたちは、霊の導きに従って生きているなら、霊の導きに従ってまた前進しましょう。うぬぼれて、互いに挑み合ったり、ねたま合ったりするのはやめましょう」と。

◆去年は宗教改革500年の記念の年でした。宗教改革の3大原理は、①聖書のみ ②恵みのみ ③万人祭司、この3つであります。どの一つも欠かすことはできませんが、第3の「万人祭司」とは、キリスト者一人一人、信徒一人一人が、祭司となり、預言者となり、主イエスの恵みの証人になることとして、受け止め直す必要があるのではないのでしょうか。私たちは、たとえほかのことは何もできなくても、主イエス様における神様の限りない御愛によって救われた者として、この驚くべき御愛の証言はできるのではないのでしょうか。私たちも、自分自身の救いの経験に基づいて、神の恵みを証言者、伝道者になりましょう。

◆お祈りいたします。

恵み深い主イエス・キリストの父なる神様。あなたは御霊において、私達を覆い包み、私達の内に居まし、その愛の御業、憐れみの御業を為さっていて下さいます。そしてあなたは、私達を顧み、万事を益に変えて下さいます。今、私達は、自分自身の全てを、あなたの御手にお委ねいたします。ただただあなたの御愛の証人として歩ませてください。そしてあなたの御栄えが現れますように。そして一人でも多くの人々が救われますように。この祈りを主イエス・キリストの聖名によってお祈りいたします。アーメン。